（ 続紙 1 ）

| 京都大学 | 博士（地域研究） | 氏名 | Yunxi Wu |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | Development of Oolong Tea Industry in Vietnam:<br>Focusing on Its Linkage with Taiwan<br>（ベトナムにおけるウーロン茶産業の発展<br>―台湾との関係に着目して―） | | |

（論文内容の要旨）

東南アジアにおいて、国際的な農業投資は農業発展をけん引しているが、いっぽうで農民からの農地の収奪や環境汚染等の問題も生んでいる。本論文は、台湾による投資を端緒とするベトナムにおけるウーロン茶産業の発展過程を総合的に分析することにより、国際的な農業投資による農業発展を円滑に推進するための基礎条件を明らかにすることを目的とした。

第1章では、国際的な農業投資に関する先行研究を踏まえて、ベトナムにおけるウーロン茶産業のための国際投資の特徴を要約し、本研究の目的と本論文の構成を示した。

第2章では、ベトナムによる農業投資の制度的制約を明らかにするためにベトナムにおける土地法の変遷を概観するとともに、調査対象地域である中央高地の農業や土地利用と移住プログラムの歴史的な展開過程を提示した。これらを踏まえて、本研究の研究手法を紹介した。

第3章では、台湾におけるウーロン茶産業の発展を概観し、国内外の消費拡大に伴い国外に茶葉の生産地を求めたこと、これが国内生産者との摩擦を生み輸入茶葉の品質管理が厳格化されたことを指摘した。

第4章では、1990年代半ば以降にベトナムにおけるウーロン茶産業に参入した台湾の投資家が直面した課題と対応を、導入期、拡張期、調整期に分けて検討した。導入期にはベトナム中央高地の自然環境に適した栽培方法の確立と台湾市場の要求を満たす品質管理が課題であり、台湾から専門家を招へいする等により対応したこと、拡張期には茶葉生産の農地の確保が困難となり、地元農家との契約栽培の導入等により対応したこと、調整期には残留農薬に関する台湾側の規制強化が課題となり、契約栽培農家の厳選等により対応したことを明らかにした。また、この過程でウーロン茶の栽培・加工技術が調査対象地域の農家や労働者に移転されたことも指摘した。

第5章では、ウーロン茶産業に参入したベトナムの起業家に焦点を当てた。ベトナムの起業家は、他業種からウーロン茶産業に参入し、茶葉の栽培、加工、輸出をビジネスとする企業体、茶葉の栽培を請け負う契約栽培農家、台湾系のウーロン茶加工工場の労働者が独立して小規模な加工工場や仲買を営む起業家からなる。これらの起業家は、台湾におけるボトル飲料の原料となる低品質のウーロン茶市場やベトナム国内で

の市場を開拓し、ウーロン茶産業の栽培、加工、市場を多様化させることに成功したことを明らかにした。

第6章では、ウーロン茶産業への就労機会が地域住民の生業や生活に与えた影響を考察した。ウーロン茶加工工場での住み込み就労は未だ住居を確保できていない移民にとって格好の就労機会であること、移民は資金を蓄積し農地を購入する傾向にあること、またこのような就労機会があることがさらなる移民を呼び込む一つの誘因となっていることを明らかにした。また、在来の少数民族の女性は、仏領期以降、ベトナム茶の茶葉の収穫作業の経験があり、それを生かしてウーロン茶の収穫作業においても貴重な労働力となっていること、その結果、少数民族世帯では女性が主たる家計支持者となっていることを明らかにした。

第7章では、製品の品質管理について、とりわけ残留農薬の規制という観点から検討した。台湾への輸出業者が、栽培農家における農薬使用をモニタリングする体制を構築し、その結果、ベトナムから台湾へ輸出される茶葉の品質は高い評価を得ていること、地方政府の農業局は、これを補完し、農薬販売店や農家向けの講習会の企画や残留農薬に関する啓蒙活動を展開していることを明らかにした。品質管理については、現状では輸出業者と農業局の活動が効果的に機能しているが、さらに規制が強化される場合には大きな課題となると指摘した。

第8章では、主たる研究成果を要約するとともに、台湾による投資を端緒とするベトナムにおけるウーロン茶産業の発展を、台湾とベトナム双方の関係者によるさまざまな課題に対する柔軟な対応と生産－消費連関の多様化の過程であったと結論付けた。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

東南アジアにおける近年の農業発展をけん引しているのは、国際的な農業投資である。天然ゴムやオイルパームに代表されるこのような農業発展は、地域経済を活性化し農家の所得を飛躍的に向上させる場合もあるが、地域社会は農業投資の流動性や国際市場における農産物価格の不安定性等のリスクに晒されるようになる。同時に投資企業による農地の囲い込みによる地元農民からの土地収奪や、化学肥料や農薬の過度の使用による環境汚染等が顕在化している場合もある。熱帯におけるバイオマス生産が、食料供給に加えて化石資源に代わる原材料供給という観点からも注目されているなかで、熱帯地域社会にとっては国際的な農業投資をいかに有効に活用するかは愁眉の課題である。

本論文は、ベトナムにおけるウーロン茶産業を対象として、国際的な農業投資を端緒とする農業発展が地域社会のさまざまな関係者との協働を展開する過程を解明し、それに基づいて地域社会の諸条件に適合した農業発展を実現するための基礎条件を提示することに成功している。本論文の学術的な意義は、以下の3点に要約することができる。

第一は、ベトナムに参入した台湾の投資家の本国との関係に着目した点である。東南アジア地域研究において、域外からの農業投資が地域社会の社会経済に与える影響についてはすでに多くの研究蓄積があり、そこでは投資家の判断や行動が地域社会との関係に基づいて分析、評価されている。本論文では、それに加えて、産品の輸出先でもある投資家の母国との関係に着目し、投資家と母国の政府や市場との緊張関係が投資家の判断や行動を規定する一つの要因となっていることを明らかにした。それは、とりわけ産品の品質管理に関して顕著であり、農業による環境負荷の軽減のためには輸出先の政府の規制や市場の圧力が決定的な影響力をもつことを示唆している。東南アジア地域研究のスコープを拡張することの重要性を認識させる指摘である。

第二は、地域社会の在来の少数民族、移住者、地元の企業や商人、地方政府等、さまざまな関係者のウーロン茶産業との関わりとその影響を解明したことである。24時間操業のウーロン茶加工工場における住み込み労働が移住を促進し、それが在来の少数民族の土地所有の周縁化の要因となっていること、女性に適した収穫作業における大量の雇用労働により地域住民世帯では女性が主たる家計支持者となったが、それが必ずしも世帯内における女性の地位向上にはつながっていないこと等、ウーロン茶産業の発展による地域社会の変容を、人口構成や地域住民の生業構造、ジェンダー間の役割分担等を視野に入れて包括的に論じることに成功している。

第三は、1990年代半ば以降、約25年間にわたるウーロン茶産業の発展過程は、台湾の投資家とベトナムの起業家が中心となった多様で重層的な交渉が主導した地場産業化を基調とすることを見出したことである。そして、この基調を下支えした基礎条件として、ウーロン茶産業が、巨大な資本や企業により独占されたものではなく、小規模で相

互依存的な投資家や起業家によって構成されたこと、投資家や起業家の多様性が変化する課題への柔軟な対応を可能にしたことを指摘するとともに、それが国際的な資本のもつ流動性リスクを抑制した可能性を示唆した。

このように本論文は、国際的な農業投資という新たな潮流に対応した農業・農村研究を地域社会における投資家を含む多様なアクターの協働という観点から展開し、今後の東南アジアの農業・農村の持続的発展の一つの方向性を示している。また、農業投資をめぐる互恵的な国際関係の構築に関しても示唆に富む研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年6月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。